

支援者育成公開プログラム  
アトリエ見学ツアー &  
インターンシップ研修

II 活動報告 ①

表現の場をひらく





支援者育成公開プログラム  
アトリエ見学ツアー & インターンシップ研修

# 一人ひとりの表現を仕事に

— 場を開き、共に考える —

「表現すること」は、人間が生きることそのもの。そして、その支援は、福祉の延長線上にあります。一人ひとりの個性ある表現は、その人らしく生きることのできる環境や、それを理解してくれる人々との関わりの中で、育まれていくのではないでしようか。

日頃、「施設で表現活動をしたいが、どうやって支援したらいいのか」といった問い合わせや「現場を見せてほしい」という依頼が多いことから、アートセンター集では、創作の現場を公開し、共に「支援とはどうあるべきか」を考える「アトリエ見学ツアー」を実施しました。

ツアーでは、川口市内の5つのアトリエを巡り、様々な障害のある仲間たちの創作現場を見てもらいました。時には仲間が案内役となつて作品や活動を紹介。工房集の理念や一人ひとりの表現と向き合う支援の在り方、それによる仲間やスタッフの変化などを話し、最後にみぬま福祉会後援会が運営するカフェで振り返りを行い、意見や課題を共有しました。展覧会にあわせ行つた3回のツアーには、福祉施設職員を中心約60名が参加しました。

また、創作の現場で一日、仲間とスタッフとの関わりを体験する「インターんシップ研修」も実施。新たに表現活動を始める福祉施設の職員など11名が参加しました。



上と右の写真は別の季節。4人はいつも同じテーブルで立体、絵、詩…まったく異なる表現を黙々と続けている



「これしかできないこと」と  
繰り返し続けると  
思いもよらない力になる。



日々自分の場所でそれぞれの表現に取り組んでいる



関わりながら待つ。



仲間も自ら作品を解説

本人の「好きなこと」を積極的に認める。  
役割を強要したりしない。



表現はいろいろ  
人によっては手を動かさない時間も大事



スタッフが仲間たちの  
創作の特徴や変化を説明



インターンシップ研修  
の一コマ



スタッフに習って研修生  
がビニールテープを小さく切ってあちこちに  
ペタペタ…



それを集めては重ねていく



作品名は「スパゲティ」。「スパゲティのようだ」と仲間がいったことから命名。本人は「スパゲティ」といえず「ゲティ」という



## アトリエ工輪

「川口太陽の家」と一体運営している「アトリエ工輪」では、絵画、木工、書、切り絵、立体作品など、様々な表現を「きらっと班」18名の仲間たちが取り組んでいます。仲間たちが自分の表現として「どのように楽しみながらできるか」ということを、スタッフ全体で話し合いながら仲間たちと共に活動する中で、ユニークな作品がたくさん生まれています。





インターンシップ研修の一コマ  
「あおぞら」に入った研修生は仲間に教わりながらステンドグラス制作も体験

同じモノを作ることから  
自由に作ることに変えたら、  
みんな夢中でおもしろい作品を創り出した。



みな、慣れた手つきでハンダつけ



重い障害のある仲間たちも  
各々のリズムで、織物や絵画、粘土等  
の表現に取り組んでいる



表現の可能性を模索する中で  
生まれた作品「ニギリ」  
試行錯誤の末、台座に乗せる  
見せ方もしてみた

本人の「障害」や「能力」ではなく、  
「想い」に焦点をあてる。



表現の可能性を模索し続けている中から思いも  
よらない力強い表現が生み出されることも多い



インターンシップ研修の一コマ  
スタッフ（右）は「一緒にやってみようよ！」の声掛け  
を続けてきた中での仲間の変化などを伝えた



## 川口太陽の家「じゅうに」「サンだいち」「あおぞら」

「じゅうに班」では、重度重複障害のある車イス利用の9名が、織物や絵画、粘土などの表現に取り組んでいます。「サンだいち班」では、重度の知的障害のある17名が活動。障害の重い仲間とも「表現の可能性」を模索し続け、長い時間をかけて表現が形になってきています。「あおぞら班」では、知的障害の仲間が各々のステンドグラスの作品作りに励んでいます。





普段から見学者が多い「工房集」の仲間は作品をたくさんの人人に見てももらえるのがうれしくて積極的に作品説明に協力してくれる

量や時間の縛りを設けない。  
環境づくり雰囲気づくりをしている。



仲間の表現を見て「私もやってみたい!」と様々な表現にチャレンジ



思い思いの表現が混在しながらもどこか共鳴し合って仲間もスタッフも成長している



やりたい気持ちを育てるには、  
やりたくない気持ちも大事にする。



「みんな仕事してるから僕も頑張る」とカフェで描きはじめた仲間をスタッフが紹介



見学や研修の最後は、併設のカフェで振り返り



## 工房集(アトリエ)

「工房集」では、「川口太陽の家」の従たる事業所として「めーべ班」が活動。知的障害のある18名の仲間が、絵画、織り、漫画などの表現を中心に取り組んでいます。アトリエの他に、ギャラリー、カフェ、ショップという機能も備えており、工房集プロジェクト発信の場でもあるので、来訪者が常にあり賑やかです。来訪者に挨拶したり、名前を聞いたり、自分の作品を見せたりと、歓迎ムードが育っています。



# アトリエ見学ツアー 参加者感想

■仲間の表現活動からの気づき

- ・それぞれの利用者が自身の作品にプロ意識を持つて取り組めていることに感動しました。
- ・作家一人ひとりの個性があり、また作家同士が刺激を受け作風が変わっていく（いつた）様子がよくわかりました。
- ・作品もパワフルだが、作っている人もパワフル（自由な力）面白いと思った。

■自分の作品（表現）が多く人の目に触れたり評価されることで自信につながり、さらなる励みになり生きがいになつていると思いました。

・自分の作品を紹介されている時、二ノマリと笑顔を見せたり、自慢げな顔を見せたりする仲間がいて、仲間自身が表現活動を楽しんでいるのなど感じました。職員と仲間のやわらかな関わりの中で生まれる表現もあるとわかり、職場でも生かしていきたいと思いました。

## ■スタッフの関わりからの気づき

- ・個人の可能性を伸ばすという同じ目標をスタッフ全員が持ち、きちんとした形になつてるので、すごいなあと感じました。

## ■工房集の取り組み全般からの気づき

- ・様々な人を巻き込みながら文化を作つていることが感じられました。また、親御さんのサポートする気持ちも大きな力になつていると思いました。コーヒーとお菓子おいしかったです。
- ・保護者の方が「職員は宝です」と話されていましたこと、心に響きました。
- ・作品・商品との作成風景をライブで見られることが良さと感じた。

・アーティストの話しを聞けるのは、作品への思いを知る良い時間でした。

## ■職員の利用者への対応は柔らかく、とにかく

こから生まれるくてきな作品の数々にとても感銘を受けました。これまで既存の作業をどうすればやつてもらえるかということを、つい考えがちでした。しかし、工房集では本人のできること（強み）をしつかりアセスメントし、そのできることから活動内容を決めるという逆の発想で取り組んでいたので、とても衝撃を受け、ぜひ参考にしたいと思いました。まずは職員の意識改革からやつていかなければいけないことを知り、その大役を任せられた気持ちです。

## ■一人ひとりの強みを引き出し、好きなこと、やりたいことが仕事になつていて

自分で仕事に取り組める環境がある。表現したことを評価し、職員間で共有、アイデアを持ち寄り商品化している。表現活動を通して社会への発信、つながりができる。障害の特性に配慮した環境設定がなされている。利用者同士が互いに励まし、刺激し合いながら取り組める環境がある。職員との関係性も作品作りには欠かせず、いかに利用者の仕事がしやすい雰囲気を作れるかも大切。作品作りが目的ではなく、人と作品に対する意識（想い）が強く、集中して行っていたことでした。これまで「この場

れるか」をつい考えがちでしたが、それぞれの「表現したいこと」を一番に考え、様々なことを提供していきたいと思いました。

- ・生活介護の支援でも「その人しさ」や「社会参加」「生活機能訓練」など、悩むことが多かったが、スタッフの利用者との関わりを見て、改めて考えるヒントをいただきました。
- ・当施設でも頑張ると思いました。

■工房集で表現された作品は、一人ひとりに大きな違いがありました。これは利用者が選ぶ題材、素材、色、扱い方など、自由に表現ができる環境が整えられているからこそ。一方、興味深いことは、活動班の中で利用者同士が影響し合っていること。絵画、機織りなど個性が認められつつもそれが影響し合い、表現に対する意欲が変化している。無理強いをするわけではなく自分の意思で決めていることは、すごいことだと感じます。たくさんの見学者が来られ、利用者もそれに慣れていますが驚きでした。障害者の表現活動が社会で理解され、その強さを社会が認めているよつな気がしました。

■職員がメンバーのベースを大事にし、楽しい雰囲作りを重要としていること、視点を少し変えるだけでメンバーの可能性が広がることを知りました。また、メンバーの課題となる行動についてもその行為そのものの背景を知るという意識を持つことの大切さを知りました。私自身「表現活動」を特別なものと意識し過ぎていました。表現活動に対する考え方方は、どの支援についてもあてはまる根本的な考え方であることがで大変良かったと思います。

# インターンシップ研修 参加者感想

■利用者と職員の関わり方や距離の取り方、どのように支援をされ表現活動が展開されている

持つて取り組めていることに感動しました。

・作家一人ひとりの個性があり、また作家同士が刺激を受け作風が変わっていく（いつた）様子がよくわかりました。

・生活介護の支援でも「その人しさ」や「社会参加」「生活機能訓練」など、悩むことが多かったが、スタッフの利用者との関わりを見て、改めて考えるヒントをいただきました。

■工房集で表現された作品は、一人ひとりに大きな違いがありました。これは利用者が選ぶ題材、素材、色、扱い方など、自由に表現ができる環境が整えられているからこそ。一方、興味深いことは、活動班の中で利用者同士が影響し合っていること。絵画、機織りなど個性が認められつつもそれが影響し合い、表現に対する意欲が変化している。無理強いをするわけではなく自分の意思で決めていることは、すごいことだと感じます。たくさんの見学者が来られ、利用者もそれに慣れていますが驚きでした。障害者の表現活動が社会で理解され、その強さを社会が認めているよつな気がしました。

■職員がメンバーのベースを大事にし、楽しい雰囲作りを重要としていること、視点を少し変えるだけでメンバーの可能性が広がることを知りました。また、メンバーの課題となる行動についてもその行為そのものの背景を知るという意識を持つことの大切さを知りました。私自身「表現活動」を特別なものと意識し過ぎていました。表現活動に対する考え方方は、どの支援についてもあてはまる根本的な考え方であることがで大変良かったと思います。

■福井市立福祉施設職員以外の気づき

- ・利用者が何を生み出すのかを一緒にになって悩み考え、楽しむことが大切と改めて認識しました。私たちが手を加えることで本人の作品ではなくなってしまうのではないかと思つていましたが、できることはやつてもらい、できない部分をサポートするという捉え方を聞いて、手助けは悪いことではないと気づくことができました。

・利用者らしさを見つけるにあたり、職員の押しつけ、偏見にならないようにするのが、難しいと思いました。特に重度の利用者や付き合いが長い人に対して、「これが好き、得意」と固定観念で決めつけがち。豊かな視点で利用者を見て関わっていました。

・「作品」にこだわり過ぎて「どうやつたら売れた。（学校関係者）

・自分の作品（表現）が多く人の目に触れたり評価されることで自信につながり、さらなる励みになり生きがいになつていると思いました。

・自分の作品を紹介されている時、二ノマリと笑顔を見せたり、自慢げな顔を見せたりする仲間がいて、仲間自身が表現活動を楽しんでいるのなど感じました。職員と仲間のやわらかな関わりの中で生まれる表現もあるとわかり、職場でも生かしていきたいと思いました。

・保護者の方が「職員は宝です」と話されましたこと、心に響きました。

・作品・商品との作成風景をライブで見られることが良さと感じた。

■福井市立福祉施設職員以外の気づき

・一人ひとりが得意・好きなことを職員さんが引き出していることがわかりました。福祉の道を志す学生として大変勉強になりました。（学生）

■一人ひとりの強みを引き出し、好きなこと、やりたいことが仕事になつていて

自分で仕事に取り組める環境がある。表現したことを評価し、職員間で共有、アイデアを持ち寄り商品化している。表現活動を通して社会への発信、つながりができる。障害の特性に配慮した環境設定がなされている。利用者同士が互いに励まし、刺激し合いながら取り組める環境がある。職員との関係性も作品作りには欠かせず、いかに利用者の仕事がしやすい雰囲気を作れるかも大切。作品作りが目的ではなく、人と作品に対する意識（想い）が強く、集中して行っていたことでした。これまで「この場

所でこの活動をする」「〇時になつたら水分補給、トイレへ行く」等、様々な場面で利用者を抱入れよう入れようとしていたところがありました。その考え方から、利用者にとっては過ごしにくい環境を作つてしまつたと反省しました。私自身、このような考え方の変化に気づいたことはとても大きく、今回研修に参加することができて大変良かったと思います。

※アンケートより特徴的な感想を抜粋しました。